

アメリカの“南部”ノース・カロライナの地理

二 瓶 直 子

1975年2～8月、アメリカ合衆国ノース・カロライナに滞在し、地理学的観察を行う機会を得た。今回は、I 所謂“南部”の概念、II 同州の自然と農業、III タバコ栽培の実態、に就いて報告した。

16 C. 終り頃から、タバコ・とうもろこし栽培による植民に始まって、綿花栽培、奴隷制度の拡大と定着、連邦からの脱退と独立、南北戦争、敗北、占領、貧困、北部への経済的社会的従属、黒人差別、と展開する歴史の中で、現代の南部の本質は多様に特徴づけられる。即ち、a) 白人優越感 b) 旧南部を代表する3要素(綿花大農場、黒人奴隷制、南部貴族の守った騎士道)の中、貴族性が残存したもの。c) その歴史の大部分は大地を耕す事であったことから、農業諸階級が南部の思考形態、生活を規定する決定的要素を与えた等である。このように、“南部”は単なる緯度的南ではなく、特異な纏まりとして発展してきた。

同州の地形は、①山地(アパラチア山脈に属する)②ピードモント台地(残丘を含む)、③海岸平野(上位2段、中位3段、下位2段に細分)へと、西から東へ移行する。海岸には米国最大の沿岸外砂州が発達する。②と③は全面積の84%を占め、長い生育期間(約185～260日)と相俟って、主要な農業地域を形成している。一般土壌分類上②と③で赤色・黄色ポドゾル土(旧称)が卓越する。適地適作の観点から土壌条件は重要で、1:20,000以上の土壌図が作成され、諸種の農作物、樹木に対する各土壌区の可能性、あるいは適合性まで調査され、農林業その他各方面で現実に活用されているのは注目値する。植生は、草地は少なく林地が主で、②でshortleaf pine, shorter-leaf pine ③でlongleaf pine, loblolly pineが優占する。

主産業は、タバコ栽培を中心とする牧畜、綿花、ピーナツ等の混合農業である。農家の階層分化は近年急速に進んでいるが、農地拡大(人口移動)の過程あるいはタバコ栽培の特質から、1戸当り経営耕地面積が極端に小さい(全米平均の1/2以下)。近年自作が過半数を占めるようになったが、未だに特に③海岸平野では小作率が高い。これはタバコ栽培との相関で説明され、綿花栽培とのそれではない。小作はブアホワイト・黒人等複雑な人種問題を反映している。なお、会社組織の農地所有は2%に満たない。

植民当初から原住民によって栽培されていたタバコ(burley種)は、1920年代になつて、生育期間が長く日射が強いという気候と、排水良好な粗粒質土壌の広汎な分布を至適条件としてflue-cured tobaccoが導入されて以来、綿花に代わる換金作物として、全米1位の生産量を誇るようになった。産地は①New Belt ②Border Belt ③Old & Middle Belt ④Burley Beltに区分される。11～1月の苗床消毒に始まり、播種、本畑への移植、トッピング、7～9月の収穫・乾燥と、タバコ栽培は通年して労働集約性が極端に高い(多量の手労働を要する綿花の30倍以上)。このことは小作を温存させる要因となっている。乾燥したタバコは全州で100カ所以上に及ぶ

warehouseで競売にかけられ(東部では乾燥倉庫で1~2年熟成され)、主としてピードモント地域にあるタバコ生産工場に運ばれる。

タバコの苗床その他の耕作風景、畑・沿道・農家周辺に点・列・群をなす新旧各型のbarn(乾燥小屋)、町にある広大な平屋のwarehouse、タバコ害虫駆除の広告板等は当地特有の景観を作り上げている。

(1976.7.3)

中央アジア見学旅行

浅海重夫

昨昭和51年夏に開かれたモスクワの第23回国際地理学会議のあと、ポストツアーの1つに組まれた中央アジア地方の見学旅行に参加した。中央アジアの4つのソ連邦内共和国のうち、主としてウズベク内の主要な都市を航空機であちこち飛びあるき、各都市の周辺をバスで廻るといって約10日間のかなりいそがしい旅であった。ウズベクの首都でソ連第4の大都会であるタシケントを根拠とし、フェルガナ・コカンド・サマルカンド・ブカラなど、かつてのシルクロードの中継地に残る回教文化の遺跡と、乾燥地を緑野に変えた農業開発の現状を見るのを目的とし、コルホーズの見学などをとおして現地住民の様子にもふれたいという望みもあった。

タシケントは1960年の大地震のあと、高層ビルの建設や市街地の拡張などの著しい復興ぶりを見せ、ソ連の各地方からの流入による人口増で170万人の大都市になっている。

フェルガナはシルダリア川とその支流が環流するフェルガナ盆地の中心地で、ここからコカンドにいたる間の綿花畑や用水路を見、コカンドのレストランではぶどう、すいか、メロンなど豊富な果物を賞味して、40℃をこえる午後の暑さに耐えた。街路には溝に水を流し、街路樹の緑をたやさないが、綿や小麦の畑は礫質土壌で、日本の耕作地と比較すればいかにも低収量型の土壌であり、管理不十分の農業としかうつらない。

サマルカンドはティムール王朝以来のモスクが保存され、これを観光資源として客を誘致する一方、紡績や機械製品の工業都市にも発展しつつある。ここから東方にタジク共和国内に入った所に古都ベンジケントがあり、アラル砂漠からの飛砂で埋没した古い住居跡のある台地面と接して、カラダリア川沿岸に今のベンジケントの町が開かれているのを見た。ツアーコースの最西端にあたるブカラには、最古のイスラエルサマニモスクがあり、その周辺の公園の樹間に設けられたチャイハナ(茶屋)で、ドピン1杯10カペイカの番茶に似たお茶を飲んだ。このあたりの木の根方に、水の干上ったあとのギブスの白い沈着が目につく。

ブカラ西方の耕地は文字通り砂漠の中の開墾地で、その風上側の砂地に、飛砂をとめるための耐干性の草を生やしておかなければならない。耕地の土壌には塩類土(ソロンチャク)がふくまれており、その改良が必要とされる。一般に乾燥地の開拓農地では除塩の技法が工夫されているが、ウズベクでは灰色土(シエローセム)に対しても冠水による塩分の除去が行われているという。

(1976.11.20)